

2022/9/22 抄読会

担当：穴井 盛靖

Russell G. Buhr, et al.

Am J Respir Crit Care Med Vol 206, Iss 5, pp554-562, Sep1, 2022

Reversible Airflow Obstruction Predicts Future Chronic Obstructive Pulmonary

Disease Development in the SPIROMICS Cohort

An Observational Cohort Study

概要

■背景

慢性閉塞性肺疾患（COPD）は気管支拡張薬吸入後の一秒率が 70%未満であることで定義されている。しかし、気管支拡張薬吸入前の一秒率が 70%未満で気管支拡張薬吸入後に 70%以上に増加する可変性閉塞（variable obstruction：VO）の意義は明らかにされていない。

■目的

生理機能、COPD 増悪、健康状態に関して、VO を有する群と閉塞性障害がない群の 2 群間で比較検討すること。

■方法

SPIROMICS（Subpopulations and Intermediate Outcome Measures in COPD Study）コホートからのデータを入手した。VO を有する群を閉塞性障害がない群と比較した。

■評価と結果

2 群間で気腫性変化、小気道疾患、肺機能、6MWT、健康状態、増悪頻度、COPD への進行を比較し評価を行った。すべてのモデルは背景、喘息歴、タバコへの曝露で調整した。VO を有する症例 175 人、閉塞のない症例 603 人を評価した。結果、VO を有する群は将来の COPD 発症のハザードが 6.2 倍になった（95%信頼区間：4.6～8.3、P=0.001）。閉塞がない群と比較して、VO を有する群はベースラインの気管支拡張薬（BD）投与前後の FEV₁ が有意に低く、BD 後の FEV₁、BD 前後の FVC が経時的に大きく低下していた。増悪に関しては、2 群間で有意差を認めなかった。

■結論

BD 前には気流閉塞を有するが BD 後には気流閉塞を認めない症例は有意な COPD 発症リスクが存在する。この知見は、BD 前の呼吸機能検査まで含めて COPD の診断基準を広げる検討を支持するものである。